国際金融論

樋口午郎

国際金融論

樋口午郎 著

東洋経済新報社

著者紹介

略　歴　明治39年山梨県生れ.
昭和8年東京商大卒業.
現在，横浜市立大学教授，経済学博士.

著　書　『銀行信用の理論』（森山書店）
『日本インフレーションの分析』（東洋経済）
『戦後財政政策と国民経済勘定』（　〃　）
『金融論』（　〃　）
『金融新論』（金融ジャーナル）
『銀行理論』（東洋経済）

現住所　逗子市久木659.

国際金融論　　定価 900 円

昭和42年5月10日　発行

著　者　樋口午郎（ひぐちごろう）
発行者　綿野脩三

発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
電話東京(270)代表4111　振替口座東京6518

© 1967 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします.

6516

序

国際均衡が完全に実現しているものとすれば、開放体制下の金融論も、封鎖体制下のそれに帰一するのであって、そこには、ただ一つの金融論のみがあることとなる。それはあたかも、一国内に多数の商業銀行が存在している場合にも、それらすべての商業銀行が、交換尻の零となるように貸出しを調節してゆくものとすれば、そこには、ただ一つの商業銀行のみが存在する国におけると同様の銀行理論が、行なわれることとなるのと、似たものがある。

しかしながら、実際には、国際均衡は、つねに必ず多かれ少なかれ、破れているのであって、そこから、外国為替・対外投資および国際流動性などの問題が生まれる。そして、それらをめぐって展開される論議は、つまりは、国際貨幣制度の問題に収斂してゆくのである。

金融論のなかで、このような特殊の領域を占めているものが、国際金融論と呼ばれるものであって、それはこの研究では次のように展開される。

鬼頭仁三郎教授は次のように述べておられる。「国際価値論のなかでは相互需要の理論等が問題にされてきたが、これらの理論と為替論との関係は従来問われたことがなく、それ故、為替論は全く浅薄なものになってしまったのである。」（鬼頭仁三郎著『外国為替講義』八ページ）わたくしも、その感を深くするがゆえに、第一章においては、物々交換のモデルによる国際価値論を、貨幣を媒介とする交換のモデルによる分析に展開することによって、そこから為替理論を引き出すとともに、貿易業者の個人的貨幣的利益は、比較生産費説で明らかにされるところの、貿易による社会的実物的利益の、貨幣的表現にほかならないことを、解明しようと試みる。

第二章においては、通貨主義と銀行主義は、二者択一的に対立する関係に立つものではなくて、補完的に並存する関係に立つものであることを明らかにして、銀行主義のみでなく、通貨主義もまた、典型的貨幣造出論に基礎をおくものにほかならないことを、論証する。

一般的見解によれば、国際金本位制度の下においては、国内均衡の犠牲の下に国際均衡がはかられているものとされる。このような見解からは、第一次世界大戦後の貨幣的国民主義が導かれ、そこからまた、所得を生むものは、輸出ではなくて輸出超過であるとする、重商主義的主張が行なわれるにいたる。第三章においては、この種の見解の誤りを論じて、国際均衡をはかることは、より高次の国内均衡を実現する手段にほかならないことを、明らかにする。

第四章においては、貿易乗数理論の意味を尋ねて、この理論は、輸出乗数効果を説くよりは、むしろ、輸出額に近い輸入額が実現する一つのプロセスを示しているものと解し、また、それとの関連において、輸出は所得創

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出的であるが、輸入は所得減損的である、と主張する見解を、批判する。

対外投資理論においては、従来古典派機構と近代派機構に重点をおいて説かれてきた。この二つの機構は、たしかに、理論的には興味深いものがあり、また、対外投資理論の基本をなすものといいうるであろう。しかしながら、実践的には、国際収支差額説やタイド・ローン方式が重要であり、とくに後者の方式によって、現実の対外投資の多くが行なわれてきたように思われる。第五章においては、対外投資の諸形態を尋ねて、これらの諸点に論及する。

アジア経済の発展をはかる基本は、外国資本の導入によって社会資本を形成し、もって、アジアの非近代的因襲や制度を変革することにあって、第六章においては、そのための外国資本は、タイド・ローン方式よりも、インパクト・ローン方式のほうが好ましいことを指摘する。

国際金本位制度の機能は、金の自由移動によって、国際決済をつけるとともに、それを通じて、国際均衡を自動的に実現することにあって、そのようにして、国際均衡が実現しているときには、金はもはや象徴的な存在量で足りることとなるのであって、リカードの教義はこのようなものと解される。ところが、第一次世界大戦後、人々は金の節約をはかるために金為替本位制度を採用し、現在もこの制度がとられている。しかしながら、このような制度は明らかにリカードの教義への背反を含むものであって、現に世界にみる国際金融上のもろもろの困難も、多くはここに胚胎する。かくて、国際貨幣制度の改革案が、種々論議されているのであるが、そのうちの一つに、多数国際通貨制度案がある。

思うに、多数国際通貨制度の極致を示すものが、ケインズの国際清算同盟案であり、またそこに見いだされるものは、国際金本位制度の真髄である。第七章においては、このような見解を明らかにして、国際貨幣制度の発展してゆくゆくえを示そうとする。

貨幣の価値保蔵機能重視の重商主義を退けて、貨幣の交換媒介機能重視の上に理論の展開を試みたときに、経済学が生まれ、経済の調和的成長の道も開かれた。しかるに、第一次世界大戦に狂って、人々が、ふたたび貨幣の価値保蔵機能を重視するや、金の争奪は激しくなって、相克の世界が出現し、第二次世界大戦が導かれた。

戦後においては、国際協調の上にＩＭＦ体制が樹立されたのであるが、その国際協調は、赤字国に対する援助にとどまって、より高次の国際協調すなわち国際均衡そのものの実現を意味するものではない。そのことは、人々が依然として貨幣の価値保蔵機能を重視していることを示すものである。人々がふたたび貨幣の交換媒介機能を重視する思想に立ち戻ったときに、調和的経済成長の世界が開け、地上に真の繁栄と平和と幸福が訪れるであろう。終章においては、このような見解を展開する。

早く世に問うたわたくしの『金融論』は、貨幣市場と資本市場の明別の上に立って、金融理論の体系的考察を試みたものであった。この両市場のうち貨幣市場についてのいっそう立ち入った研究は、すでに『銀行理論』として世に送った。わたくしのこれらの著作はすべて、封鎖体制をとったものであったので、それは開放体制に展開されなければならなかった。いまここに『国際金融論』を世に送るのは、そのためである。そして、わたくしの次の研究は、資本市場についてのいっそう立ち入った考察を進めることである。

思えば、本書の第一章をなす部分は、十二年前の早春のころ『バンキング』誌上に発表し、それに続く諸章の基本的構想も、多くはその後の同誌上に発表したものである。ここに一書をなすにあたり、故所栄治郎氏の厚い友情と学問に対する深い理解に、感謝と敬意をささげ、冥福を祈る。

この小著の執筆に手を染めてから、いくたびかの早春を送り迎えて、いまようやくここに筆を擱く。うたた感慨深いものがある。

振袖もまじりて梅の

瑞泉寺　午郎

昭和四十二年早春

樋口午郎

目次

序……一
第一章　国際価値論と為替理論……三
一　比較生産費説と相互需要説……三
二　比較生産費と為替相場変動の限界……一四
三　三つの需要供給と為替相場の決定……二一
第二章　通貨主義と銀行主義……二九
一　通貨主義・銀行主義論争……二九
二　通貨主義・銀行主義と典型的貨幣造出……三四
三　金本位制度と通貨主義・銀行主義……四三

四　管理通貨制度と通貨主義・銀行主義……四七
第三章　国内均衡と国際均衡……五四
一　国内金融と国際金融との関係……五四
二　国内均衡と国際均衡の相克と調和……六三
三　輸出量と輸出超過……七三
第四章　貿易乗数理論と国際均衡……八二
一　貿易乗数理論の意味……八二
二　貿易乗数理論の諸形態……八八
三　貿易乗数理論と国際均衡……九三
第五章　対外投資の諸形態……九九
一　対外投資の古典派理論と近代派理論……九九
二　対外投資の国際収支差額説……一〇
三　紙幣本位制度と対外投資……一一五
四　対外投資のタイド・ローン方式……一一八

第六章　アジア経済の発展と国際投資……一二五
一　アジア経済の貧困と非近代的因襲……一二五
二　非近代的因襲と伝統的外国資本の植民地的性格……一三一
三　外国資本の役割とアジア経済の発展……一三五
第七章　リカードの教義と新国際通貨制度の生成発展……一四三
一　国際金本位制度と自動的国際流動性メカニズム……一四三
二　国際金本位制度における金の機能とリカードの教義……一四五
三　金為替本位制度の原理的欠陥と自動的国際流動性メカニズムの崩壊……一四九
四　ケインズの国際清算同盟案と国際金本位制度……一五六
五　国際通貨基金制度の創設とその欠陥……一六三
六　国際通貨制度改革についてのトリフィン案の後退……一六八
七　多数国際通貨制度の成長と新国際通貨の生誕……一七五
第八章　貨幣の交換媒介機能と調和的経済成長の世界……一八九
一　スミスの見えざる手と貨幣の交換媒介機能……一八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　ケンブリッジ学派の貨幣観と相克の世界……二〇一
三　貨幣の復位と調和的経済成長の世界……二一六
索　引……巻末

国際金融論

然らばすべて人にせられんと思うことは　人にもまた
その如くせよ　これはおきてなり　予言者なり

マタイ伝七章十二節

第一章　国際価値論と為替理論

一　比較生産費説と相互需要説

リカードの比較生産費説の骨子は、彼自身によって次のように述べられる。「イギリスは羅紗を生産するには一年間一〇〇人の労働を要し、また葡萄酒を醸造しようと試みたならば、同一時間にわたって一二〇人の労働を要するがごとき事情のもとにあるものとしよう。したがって、イギリスは葡萄酒を輸入し、そして羅紗の輸出によってこれを購うことを利益とするであろう。

ポルトガルにおいて葡萄酒を生産するには一年間僅かに八〇人の労働を要し、また同じ国において羅紗を生産するには、同一時間にわたって九〇人の労働を要するものとしよう。したがって、ポルトガルにとっては、羅紗と交換に葡萄酒を輸出するのが有利であろう。この交換は、ポルトガルの輸入する貨物がポルトガルにおいてイギリスよりも少量の労働をもって生産せられうる場合においても、なおやはり行われうるであろう。ポルトガルは羅紗を九〇人の労働をもって作りうるにかかわらず、なおこの国はそれをその生産に一〇〇人の労働を要する国から輸入するであろう。なんとなれば、ポルトガルにとっては、その資本の一部分を葡萄栽培から羅紗の製造にさいて生産しうべきよりも、一層多くの羅紗をイギリスから交換しきたるべき、葡萄酒の生産にその資本を投ず

る方が、一層有利たるべきをもってである。

かくのごとくしてイギリスは、八〇人の労働の生産物に対して、一〇〇人の労働の生産物を与えるであろう。かかる交換は、同一国内の個人間には行われ得ない筈である。イギリス人一〇〇人の労働は、イギリス人八〇人の労働に対して与えられる筈がない。しかるに、イギリス人一〇〇人の労働の生産物は、ポルトガル人八〇人、ロシア人六〇人、またはインド人一二〇人の労働の生産物と交換せられうるのである。この点における一ヵ国と多数国との相違は、資本が一層有利なる用途を求めて一国から他国へ移動するの困難なると、その同一国内において常に一地方から他地方へ移動することの敏捷なるとを考察すれば、これによって容易に説明せられるのである。」（小泉信三訳『経済学及び課税の原理』一一九―二〇ページ）

第 1 表

国	1単位当り所要労働者数	
	ラシャ	ブドウ酒
イギリス	100人	120人
ポルトガル	90人	80人

この引用文のなかに含意されているように、リカードにおいては、ポルトガル人八〇人の労働の生産物すなわちブドウ酒一単位と、イギリス人の一〇〇人の労働の生産物すなわちラシャ一単位とが、交換されるものとされているのであって、ブドウ酒とラシャの交換が、このような比率で行なわれるものとすれば、貿易によって得られる両国の利益は、それぞれ次のようになる。すなわちイギリスは、一〇〇人の労働で生産されるラシャ一単位

を輸出して、自国で生産すれば一二〇人の労働を要するブドウ酒一単位を輸入することとなるのであるから、それによって二〇人の労働を節約することができ、またポルトガルにとっても、八〇人の労働で生産されるブドウ酒一単位を輸出して、自国で生産すれば九〇人の労働を要するラシャ一単位を輸入することとなるのであるから、それによって一〇人の労働を節約することができるのである。これが、リカードの説く外国貿易の利益であって、外国貿易が行なわれるゆえんも、ここに見いだされる。

このように、リカードにおいては、ラシャ一単位とブドウ酒一単位とが交換される場合について、述べられているのであるが、ラシャとブドウ酒の交換比率がいかにして決定せられるかについては、関説するところがなかったのであって、それを明らかにしたものが、ミルの相互需要説である。

ミルにおいては、まず次のように述べられる。「イギリスにおいては、羅紗一〇ヤールを作るにリンネル一五ヤールを作るだけの労働を要し、ドイツにおいては、それを作るにリンネル二〇ヤールを作るだけの労働を要するものと仮定すれば、イギリスはドイツからリンネルを輸入するをもって利益とし、ドイツはイギリスから羅紗を輸入するをもって利益とするであろう。両国が、それぞれ自国においてこの二物品を生産していたときは、イギリスにおいては、羅紗一〇ヤールとリンネル一五ヤールとが交換され、ドイツにおいては、羅紗一〇ヤールとリンネル二〇ヤールとが交換されていた。ところが、両国間で貿易が始まるに至れば、羅紗一〇ヤールと交換されるリンネルのヤール数は、両国において同一となるであろう。しからば、そのリンネルのヤール数は、幾許に定まるであろうか。もし、一五ヤールに定まるならば、イギリスにとっては前の通りで損得なく、ドイツがすべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com